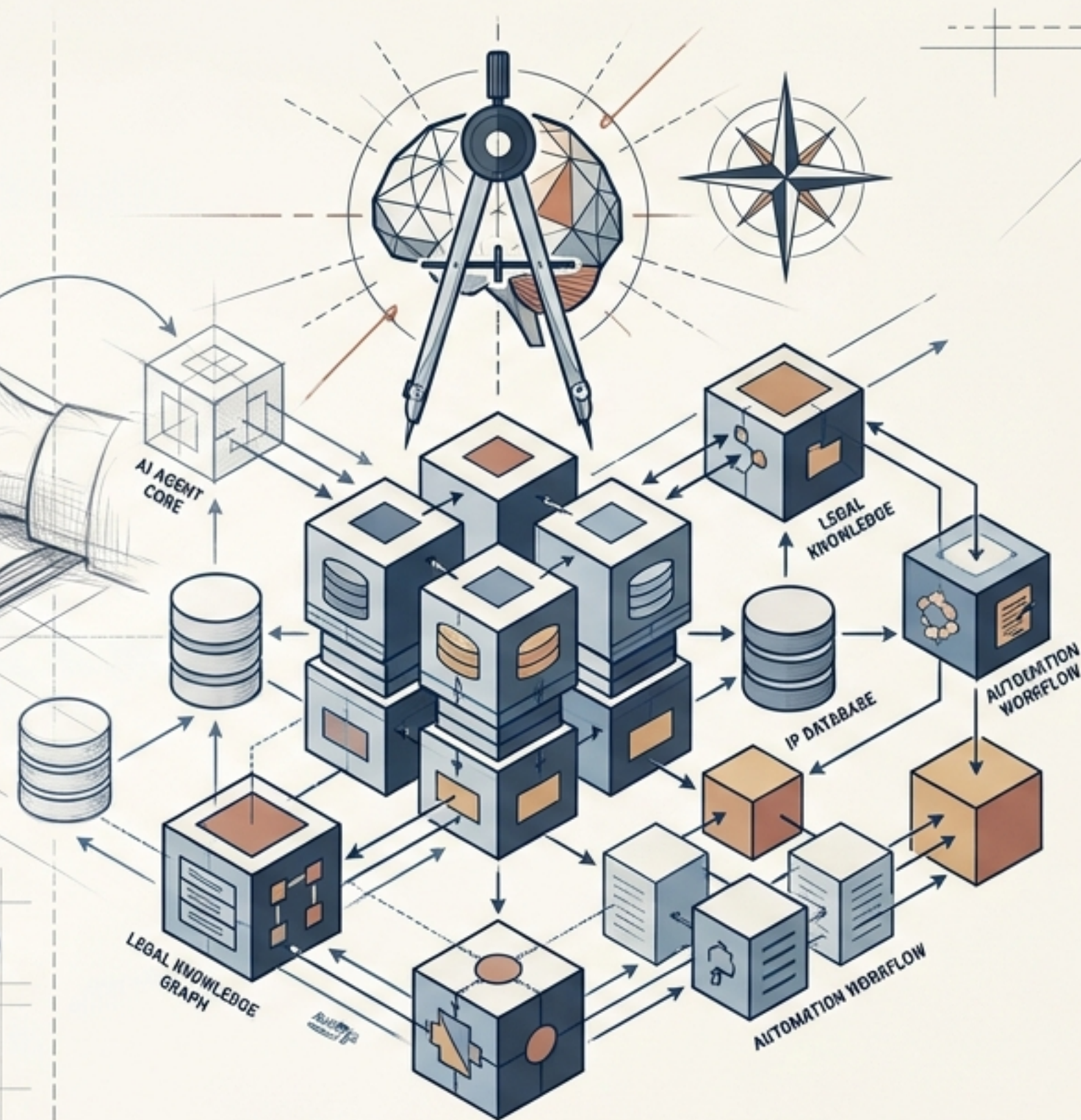


Microsoft Build 2026後の 知財専門家の役割変化

AIエージェント時代における、
作業遂行者から「システム設計者」への進化



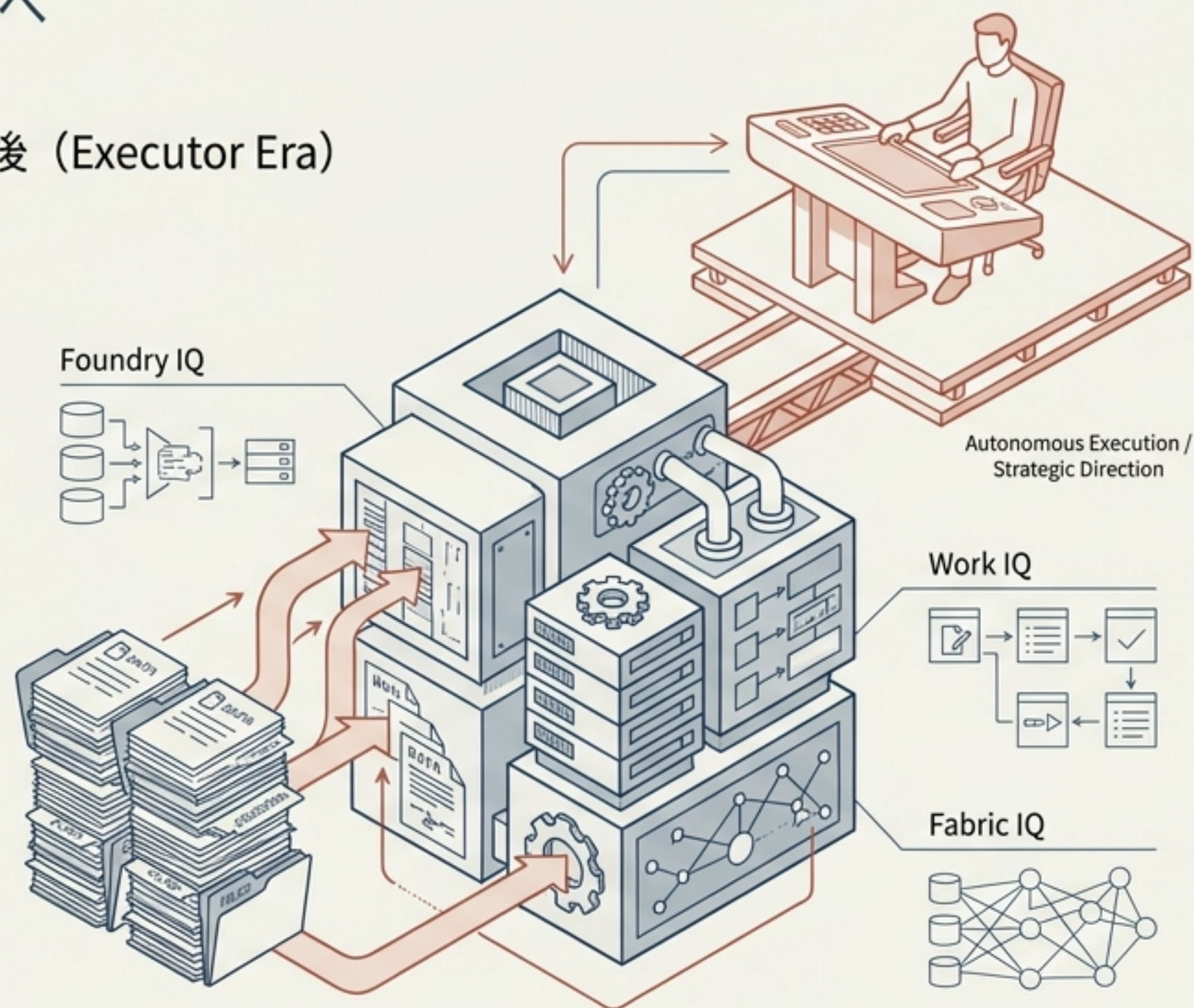
著者: Manus AI

AIは「相談相手」から「業務を遂行する主体」へ

従来 (Advisor Era)



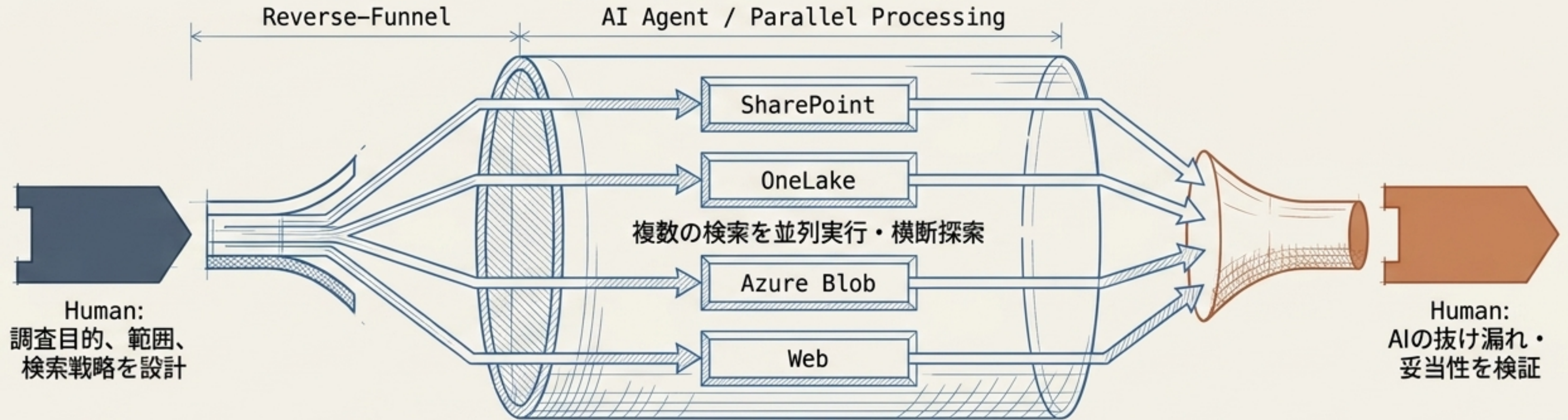
今後 (Executor Era)



Microsoft Build 2026で示された最大の転換は、AIエージェントが企業内外の知識基盤を活用し、自律的に業務を実行し始めた点にあります。

知財専門家が担う価値の重心は、「作業の遂行」から「判断設計・戦略形成・統制責任」へと完全に移行します。

Shift 1: 「調べる人」から「調査システムを設計し検証する人」へ



Human:
調査目的、範囲、
検索戦略を設計

Reverse-Funnel

AI Agent / Parallel Processing

SharePoint

OneLake

複数の検索を並列実行・横断探索

Azure Blob

Web

Human:
AIの抜け漏れ・
妥当性を検証

検索・要約

従来は人間が全件探索。今後はAI要約の妥当性検証、クレーム解釈上の危うさ、分類外の盲点を見抜く力が必須。

ノイズ除去

従来は手作業。今後はAIの抽出基準を調整し、再現性を管理・ベンチマーク作成。

報告書作成

従来は結果の整理。今後は調査結果を権利化・FTO・事業判断（法的判断・リスク評価）へ接続する。

Shift 2: 「書類作成者」から「権利形成のアーキテクト」へ

文章を一から書くことよりも、将来の事業に有利な権利範囲や、禁反言・限定解釈のリスクをどう防ぐかを設計する「アーキテクト」が求められます。

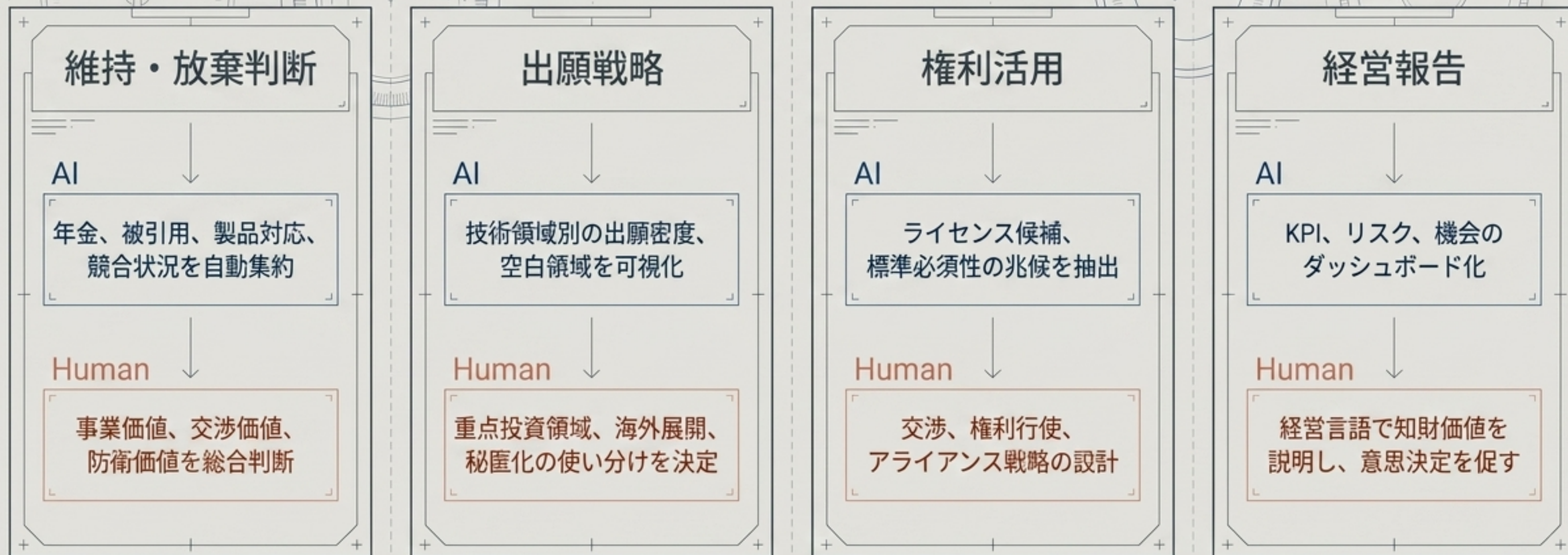
Component Breakdown Matrix

文書類型	AIが担いやすい部分	知財専門家が担うべき部分
特許明細書	実施形態の整理、用語統一、背景技術・図面説明案	発明概念の抽象化、請求項階層、均等・迂回設計への備え
意見書・補正書	引用文献との差分整理、過去事例参照、初稿作成	補正方針、禁反言リスク、権利範囲と登録可能性のバランス
FTO報告書	クレームチャート初稿、関連特許の抽出・要約	侵害・非侵害判断、均等論、無効論、設計変更提案
契約書	条項比較、差分抽出、リスク箇所の可視化	交渉方針、リスク配分、事業目的との整合性

Shift 3: 「案件処理者」から「ポートフォリオの意思決定者」へ

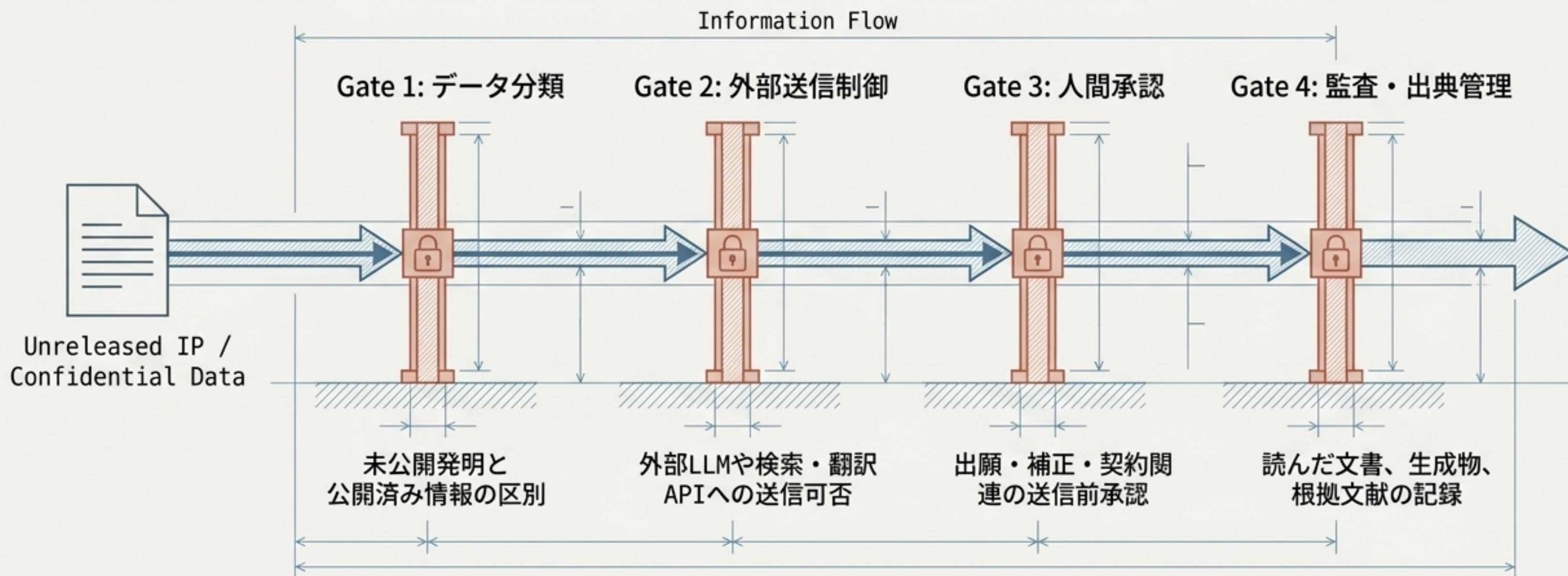
Foundry Routines / Memory

自動監視・集約



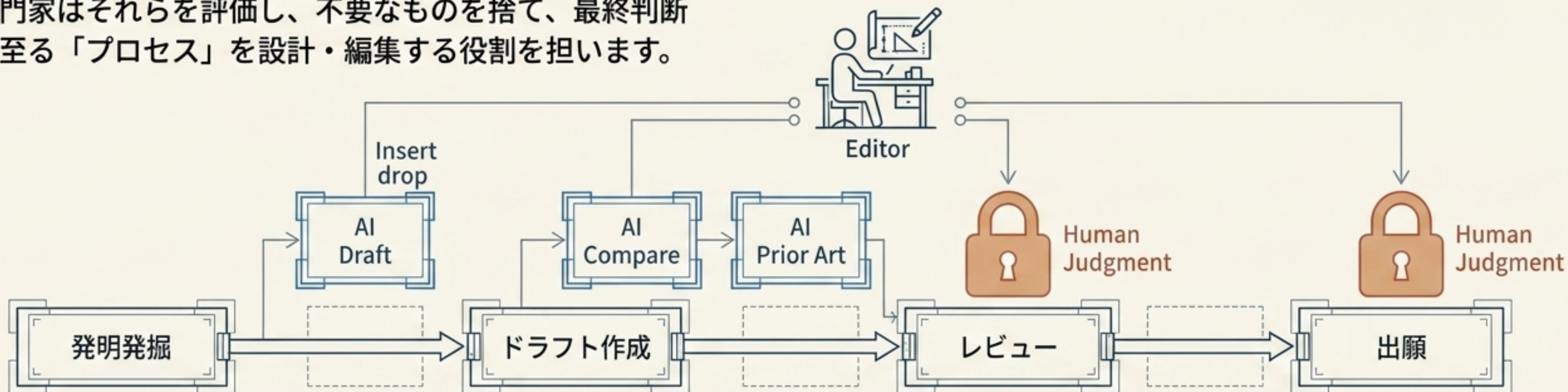
Shift 4: 「リスクを指摘する人」から「AI利用を統制する責任者」へ

未公開発明や営業秘密を扱う知財部門は、Agent Control Specification等を用い、AIエージェントの行動規範を具体的に設計する必要があります。



Shift 5: 「専門知識の保持者」から「人間とAIの協働プロセスの編集者」へ

AIが大量の選択肢やドラフトを提示する時代。
専門家はそれらを評価し、不要なものを捨て、最終判断に至る「プロセス」を設計・編集する役割を担います。



技術理解

AIの技術理解の誤りを検出し、発明概念を再定義する。

法的知識

AI生成案の法的リスクを評価し、判断基準を業務フロー化する。

実務経験

過去案件をAIが参照できるナレッジとして構造化する。

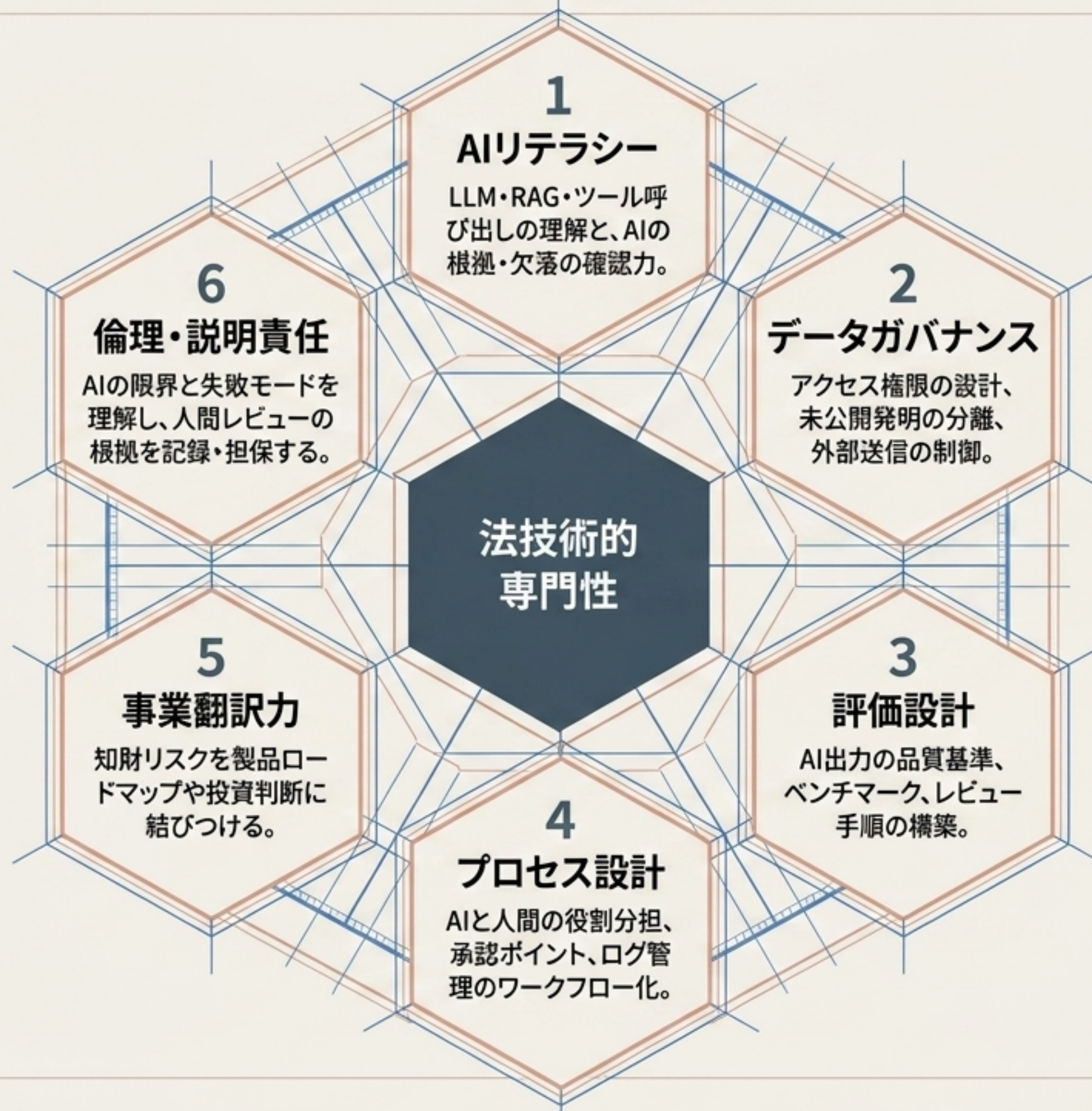
交渉力・倫理

AIの複数シナリオを活用し交渉を高度化。AI利用の限界を説明し責任を担保する。

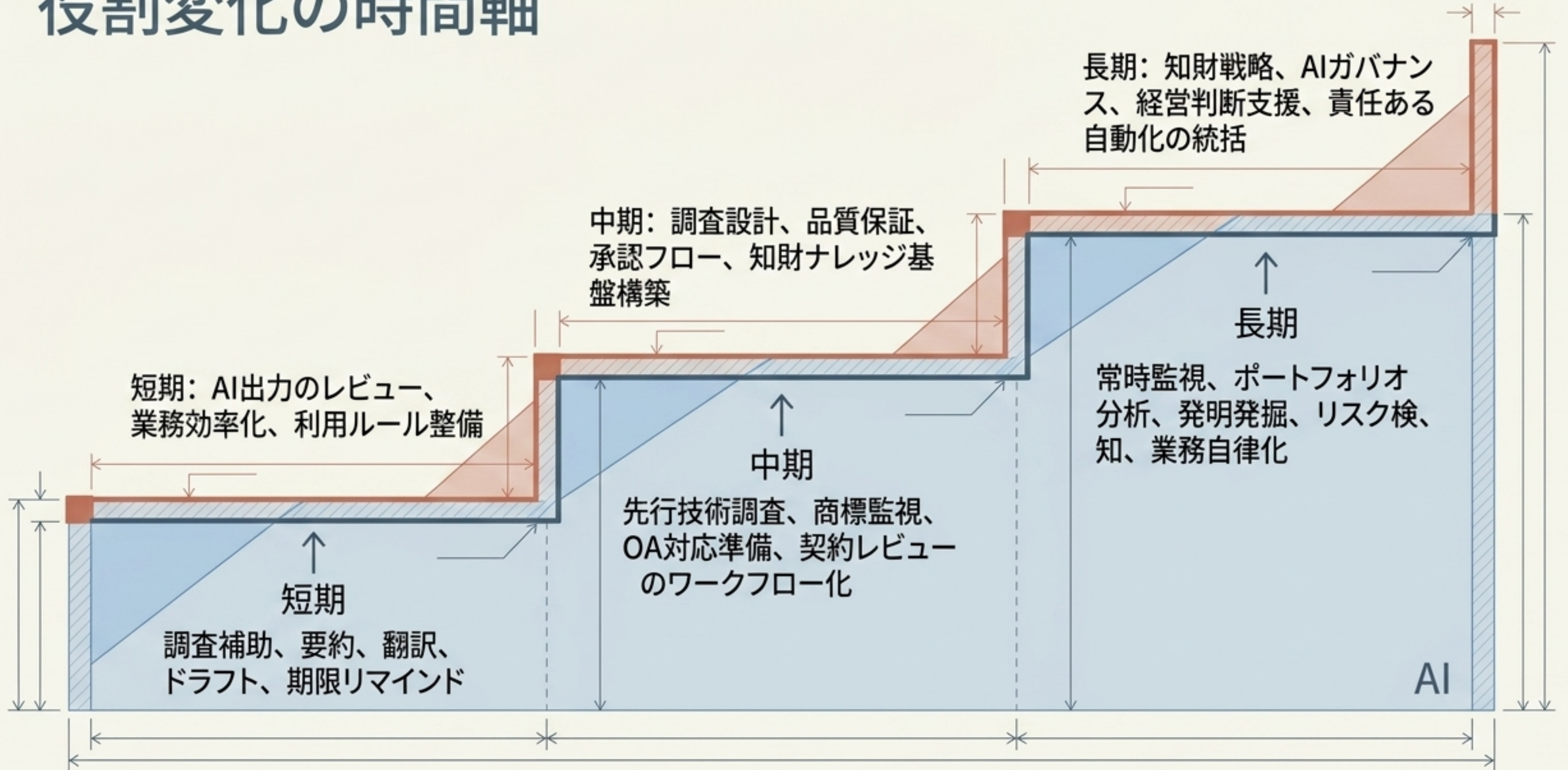
統合パラダイム：知財実務の再設計

領域	従来の役割		AI時代の役割
調査	自分で検索しノイズを除く	→	調査システムを設計し結果を検証する
書類	ゼロから文章を作成する	→	複数のAI生成案から権利範囲を設計する アーキテクト
案件	個別出願の処理と期限管理	→	データに基づく知財ポートフォリオ全体の 意思決定
リスク	抽象的にリスクを警告する	→	AIエージェントの行動規範・ガバナンス を具体的に設計・統制する
知識	自ら知識を持ち判断する	→	人間とAIの協働プロセス・ワークフロー の編集者

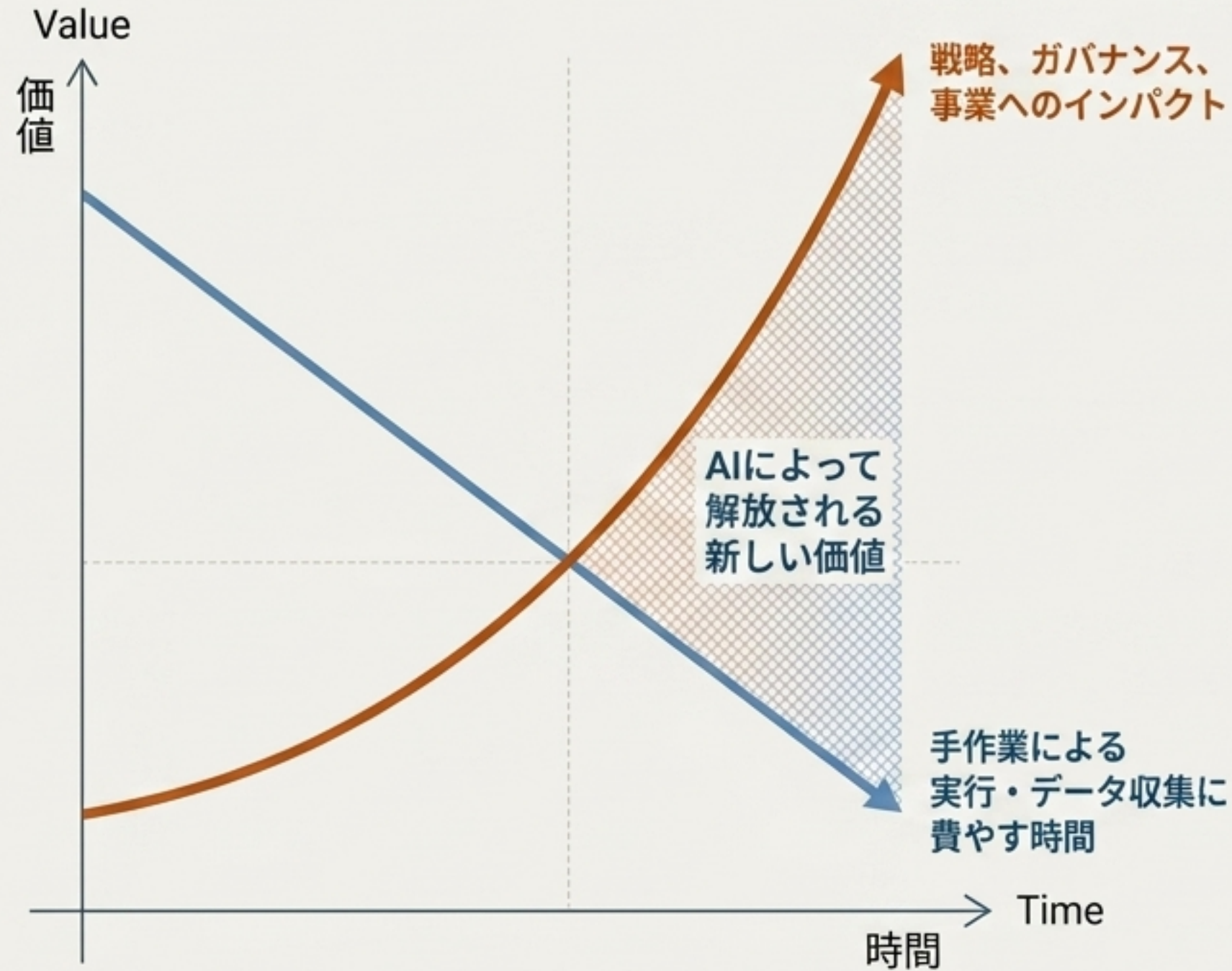
知財専門家に新たに 求められる「6つの能力」



役割変化の時間軸



結論：知財業務そのものを「再設計」する機会



知財専門家はAIと競争するのではなく、AIに任せられる部分を冷静に切り出し、人間が責任を持つべき判断を明確にすることで、企業の知的資産をより速く、広く、戦略的に守る体制を作るべきです。

Build 2026が示した「エージェントAI元年」は、単なる効率化のツールではなく、知財専門家の役割を上流かつ高度な次元へと引き上げる最大の契機となります。